

大動脈縮窄症手術例の術後長期予後調査

東北大学胸部外科 堀内 藤 吾

I. 対象ならびに方法

昭和40年1月より昭和51年12月までに東北大学および秋田大学で手術をうけ、現在生存している22症例を対象とした。男女別では男性14人、女性8人、であった。病型別では管前型11人、対向型4人、そして管後型7人であった。

調査は厚生省班会議作成の子後調査表を用いたアンケート方式によった。22名中、アンケート応答者は19名で、回収率は86%であった(表1)。また、3才未満の症例で、端々吻合を施行した10症例で心臓カテーテルによる吻合部の成長と血行動態的検索を行った。

表1 アンケート調査結果

分類	管前型	対向型	管後型	計
調査対象	11人	4人	7人	22人
回収数	9人	4人	6人	19人
回収率	82%	100%	86%	86%

II. 結 果

1. 現在の生活の状況

A. 幼児

身体の発育は全例で改善がみられ、知能の発達は全例で普通であるであった。遊び、運動能力では1例を除いて全例で改善がみられた(図1)。現在も疲れやすいと解答した症例は左心室の低形成のみられた症例であった。

B. 学童, 生徒, 学生

身体の発育は全例で改善がみられ、精神、性格の面では2名が明るくなり、残り3名は活発となった。学校の体育は全例が普通に行っていた(図2)。

C. 学校を卒業し、職業につく年齢の者

該当者7名のうち6名が有職であり、1名が職業についていなかった。職業の種類は坐ったり歩いたりする軽労働が2名、歩いたり動いたりする中等度労働が4名であった(図3)。

2. 現在の体調

N. Y. H. A. 分類によって分類すると、手術前はI度

が5名、36%、II度が3名、21%、III度が8名、43%とIII度の症例が多かったが、手術後はI度が17名、94%、II度が1名、6%と大きな改善がみられた(図4)。

3. 心臓病らしい症状の有無

症状ありと回答した症例は1名のみであり、症状は疲れやすいであった。この症例は左心室の低形成のみられた症例であった(図4)。

4. 手術の効果

よくなったと回答した症例は13名、72%で、変わらないと回答した症例は5名、28%であった。変わらないと回答した症例のうち4例が管後型で管後型に多くみられ、また手術時年齢が12~33才(平均20才)と年長例に多くみられた。

5. 心臓病のための薬

現在服用しているものは2名、13%であった。薬剤はジギタリス剤1名、降圧剤1名であった。

6. 術後遠隔期の吻合部の成長と血行動態

3才未満の症例で、縮窄部切除、端々吻合を施行した10症例で心臓カテーテルによる吻合部の成長と血行動態的検索を行った。

成長度の指標として吻合終了時に測定された左鎖骨下動脈起始部近位側の大動脈弓の直径(aとする)と吻合部直径(bとする)より両者の比 b/a を求め、術後遠隔期に正面および側面で大動脈造影を行ってもとめた比 b/a とを比較した。 b/a は全例で遠隔期に減少しており、全例で大動脈と歩調をあわした成長をえることはできなかった(図5)。

現在の生活の状況 (幼児)

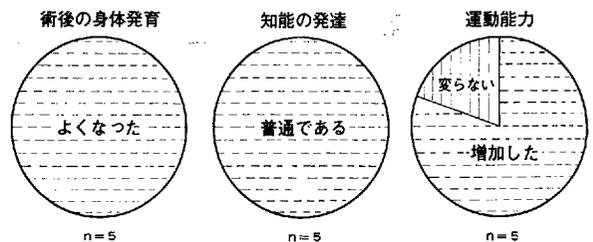


図1

現在の生活の状況
(学童, 生徒, 学生)

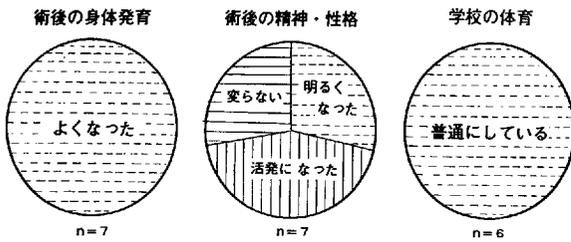


図 2

現在の生活の状況
(学校を卒業, 職業につく年齢の者)

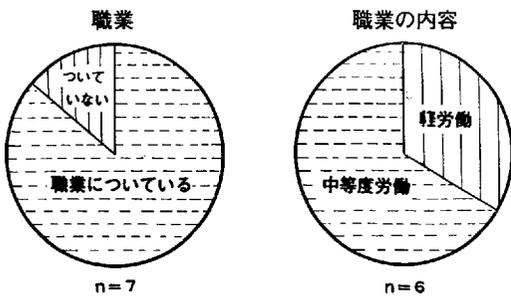


図 3

現在の体の調子

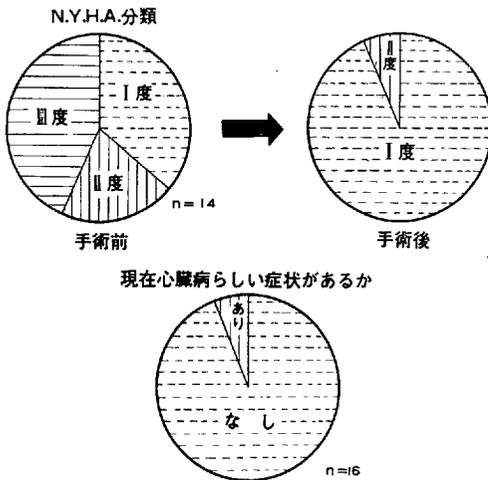


図 4

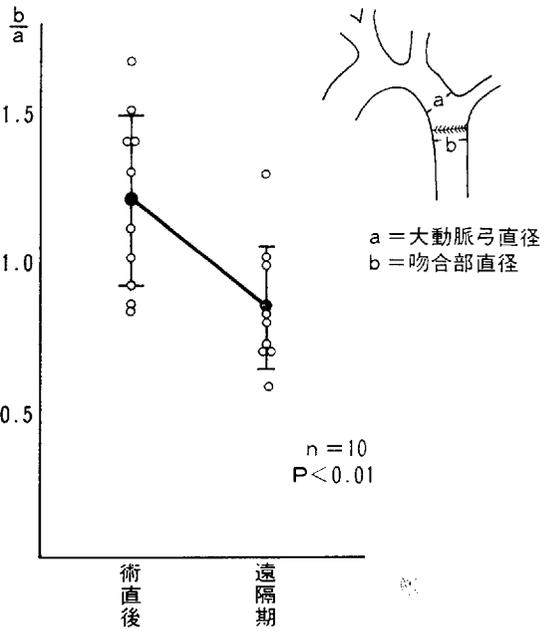


図 5

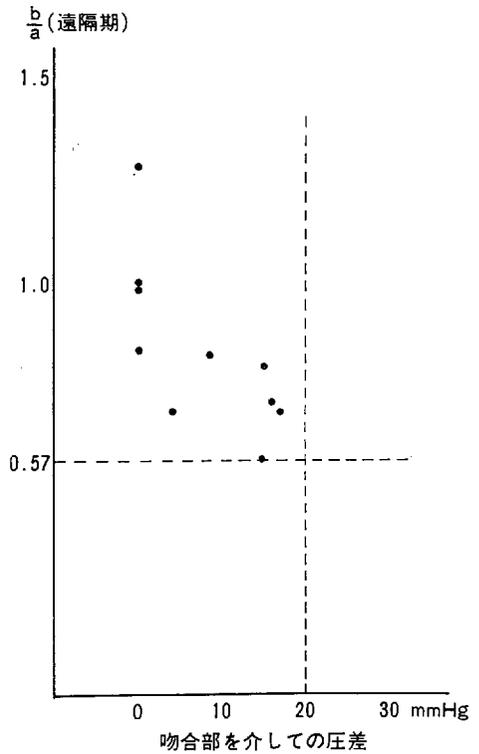


図 6

表2 項目別全体集計

	計 (名)	%		計 (名)	%
I 現在の生活状況			(記入なし)	1	
B. 幼児(該当者 5名)			D. 職業について		
i) 発育			i)		
イ) よくなった	5	100	イ) 有職者	6	86
ロ) 変わらない	0	0	ロ) ついていない	1	14
ハ) 悪くなった	0	0	ii) 仕事の内容		
ii) 知能の発達			イ) 坐っている	0	
イ) よくなった	0	0	ロ) 坐ったり歩いたり	2	33
ロ) 普通である	5	100	ハ) 歩いたり動いたり	4	67
ハ) 悪い	0	0	ニ) 激しい労働	0	
iii) 遊び			II 現在の体調(該当者 19名)		
イ) 同じ程度	4	80	手術前(記入なし)	5	
ロ) 疲れやすい	1	20	(1)	5	36
ハ) 遊べない	0	0	(2)	3	21
iv) 運動能力			(3)	8	43
イ) 増加した	4	80	(4)	0	
ロ) 変わらない	1	20	1回手術後(記入なし)	1	
ハ) 減少した	0	0	(1)	17	94
v) チアノーゼ(記入者 2名)			(2)	1	6
イ) よくなった	2	100	(3)	0	
C. 学令(該当者 7名)			(4)	0	
i) 発育			2回目手術後(記入したもの)	4	
イ) よくなった	7	100	(1)	4	100
ロ) 変わらない	0	0	III 心臓病らしい症状(該当者 19名)		
ハ) 悪くなった	0	0	(記入なし)	3	
ii) 精神性格			症状なし	15	94
イ) 明るくなった	2	29	〃 あり	1	6
ロ) 活発になった	3	42	(ホ)	1	
ハ) 変わらない	2	29	IV 手術の効果(該当者 19名)		
ニ) 悪くなった	0		(記入なし)	1	
iii) 現在学校			イ) よくなった	13	72
イ) 小学校	3	43	ロ) 多少よくなった	0	
ロ) 中学校	1	14	ハ) 変わらない	5	28
ハ) 高校	3	43	ニ) 悪くなった	0	
iv) 学校に			V 結婚と妊娠(該当者 3名)		
イ) 行っている	7	100	結婚していない	3	100
ロ) 行っていない	0		VI 薬(該当者 18名)		
v) 体育			イ) のんでいる	2	12
イ) 普通	6	100	ロ) のんでいない	14	88
ロ) 激しいのは休む	0		(記入なし)	3	
ハ) やらない	0				

血行動態的には、全例で圧較差が 20 mmHg 以下であり、また上肢の高血圧症が存在した症例もみられず満足すべき結果であった(図6)。

III. ま と め

大動脈縮窄症24名に対し、アンケートによる術後長期予後と、3才未満の症例で、縮窄部切除、端々吻合を施

行した10症例で、心臓カテーテルによる吻合部の成長と血行動態的検索を行った。

アンケートによる予後調査では前述のごとく概ね良好であった。

血行動態的には満足すべき結果をえたが、吻合部の成長は充分えられておらず、今後さらに経過を観察していく必要があると思われた。

大動脈縮窄症について

東京医科歯科大学第二外科 浅野 献一

昭和40年より51年までに新潟大学医学部第二外科で手

表 1

	例数	病院死	遠隔死	不明	生存確認
管前型	3	0	0	0	3
管後型	9	1	1	2	5
対向型	1	0	0	1	0
C/A症候群	7	6	0	0	1
計	20	7	1	3	9

術を受けた症例は20例であった。手術成績と遠隔成績は表1の如くである。

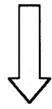
C/A 症候群の成績が不良であったが C/A+PDA+VSD はこの内2例のみで、1例を救命でき今日も元気であるが、他の5例は更に複雑な奇型であった。合併奇型として PDA を有する管前型を含めた単純型14例の成績は良好で、1例手術時38才症例が4年後に死亡したが死因は不明であった。他の生存例は凡て生活に何らの支障なく、元気に生活し、内1例は妊娠分娩を経過している。

大動脈縮窄症手術予後調査

大阪大学第一外科 川島康生, 秦石賢

1976年までの coarctation 症例(放置例も含む)は、27例で、術後死亡4例、遠隔死亡1例を除く22例にアンケートを発送。19例(87%)より回答を得た。19例の手術時年齢は、17日~47才11ヵ月、平均15才3ヵ月、調査時年齢は3才4ヵ月~50才11ヵ月、平均21才4ヵ月、術後追跡期間は2年10ヵ月~17年3ヵ月、平均6年6ヵ月であった。病型別では、simple coarctation 5例、atypical coarctation 2例で、他の12例は、VSD, PDA etc の、他の奇型を合併していた。19例中11例では coarctation 修復術を行い、他の8例では subclinical という理由で coarctation を放置した。coarctation 修復例11例の術式をみると、6例で、人工血管による大動脈再建術、

4例で、大動脈端々吻合術、1例で、上行一下行大動脈間に、人工血管バイパス作成術を行った。修復術を行った11例中、10例で、上肢収縮期血圧をみると、術前 168~240 mmHg。平均 192 mmHg より、遠隔期 110~180 mmHg 平均 140 mmHg と下降した。4例で、遠隔期になお 150 mmHg 以上の高血圧がみられたが、2例では、使用人工血管が細かった為、他の2例では、再建部位狭窄以外の因子が考えられた。修復例11例について、アンケート結果をまとめると以下の如くである。児童4例では、全例、身体的、精神的発育は順調で、元気に通学している。成人例7例では、1例を除き、全例、職業をもち(主婦3人を含む)通常の社会活動を行っている。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 対象ならびに方法

昭和 40 年 1 月より昭和 51 年 12 月までに東北大学および秋田大学で手術をうけ、現在生存している 22 症例を対象とした。男女別では男性 14 人、女性 8 人、であった。病型別では管前型 11 人、対向型 4 人、そして管後型 7 人であった。